

## 中世における『源氏物語』梗概本の古筆切

著者	中葉 芳子
雑誌名	國文學
巻	96
ページ	87-97
発行年	2012-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9185">http://hdl.handle.net/10112/9185</a>

# 中世における『源氏物語』梗概本の古筆切

中葉芳子

はじめに

一 中世書写の『源氏物語』梗概本の古筆切概観

南北朝に成立したと考えられる「源氏大鏡」「源氏小鏡」に始まる<sup>1</sup>とされる「源氏物語」の梗概本が、古筆切や零本の形ではあるが、鎌倉時代には存在したことが確認されている。このうち、鎌倉時代に書写された「源氏物語」梗概本の古筆切で、ツレが比較的数量多く集成できている、伝後伏見天皇筆切と伝二条為明筆切とを取り上げ、「鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法——古筆切を手がかりに——」<sup>1</sup>としてすでに報告している。本稿では、ツレが複数枚存していないために、先には考察の対象としなかった古筆切を取り上げる。

まずは、中世に書写された「源氏物語」梗概本の古筆切を、「古筆学大成」<sup>2</sup>を始め、「古筆切提要」<sup>3</sup>、「源氏物語断簡集成」<sup>4</sup>、「源氏物語関係古筆切資料集成稿」<sup>5</sup>、国文学研究資料館「古筆切所収情報データベース」<sup>6</sup>などによりまとめてみると、後掲の表のようになる（先に考察した、後伏見天皇筆切と伝二条為明筆切は除く。この二つは前述の拙稿参照）。ツレが存しないものが多く、現段階では梗概本の古筆切だとは言いきりにくいものもある。

例えば、伝後土御門天皇勾当内侍筆切は、裾書きがあり、散らし書き風の書写形式を採っている。この切は、ツレが見い出されず、さらに大きさが縦一三・五センチ、横六・〇センチと、冊子本であるとしても一面が完全に存しているとは考えられない

いうえ、大きさや書写形式からは小型の卷子本か、との疑問も生じる。卷子本ならば、『源氏物語』全体の梗概本ではなく、一部を抜書きした抜書本、抄出本の可能性も考えられる。

このように、後掲の表に掲げたものの中には、ツレがないために全体像が想定しにくく、梗概本以外の他のものではないか、と考えられる古筆切もあるが、現時点で梗概本の可能性が存するものについては掲げてある。ツレを見出し出していく中で、補足、訂正をしていくこととした。

## 二 南北朝以降の梗概化の方法

鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法は、田中登氏が述べられていたように、「処々語句を省略できる箇所は省略し、巧みに文章を続けていつている。注意すべきは、前述の大鏡や小鏡のように、編者による大幅な書き換えは行わず、極力原文の言葉を尊重する立場を貫いている点である」というとおりであったことは、すでに拙稿で確認している。本稿で、後掲の表に掲げた古筆切についても、鎌倉期書写のものは、基本的には『源氏物語』本文の言葉を尊重しつつ、省略箇所はまとめた表現に置き換えてはいるものの、必要最小限にとどめて、できる限り

『源氏物語』本文の表現を用いて文章を続けているとみなしてもよいだろう。

しかし、南北朝以降、要するに『源氏大鏡』や『源氏小鏡』が現れた頃からは、少し異なる梗概化の方法を採る古筆切が見られ始める。それらの古筆切を具体的に見ていく。

### (1) 伝下冷泉持為筆切の場合

まず翻刻を掲げる。

- 1 第十八 梅か枝
- 2 あさかほの宮よりけんしのひめ君の中宮に
- 3 た、せ給ふへき御さしあはせのためおり物
- 4 二かさね薫け二そへて六条院へをくり
- 5 給ふちりすきたるむめのえたに文つけて
- 6 あさかはむめか、はちりにしえたにとまらねと
- 7 うつらん袖にあさくしまめや
- 8 むめか、にいと、こ、ろのしむるかな
- 9 人のかめんかをはつ、めと

(藤井隆「源氏・狭衣物語古筆切について」<sup>8)</sup>  
紹介が翻刻のみであるので確認はできないが、藤井隆氏の述べ

られているところに従えば、室町時代初期の書写になるものだということである。この古筆切は、1行目に「第十八 梅か枝」とあるように、梅枝巻の冒頭部分、明石姫君の裳着、入内に向けて準備をする光源氏のところに、朝顔の前斎院から調合した薫物が届けられた場面を梗概化したものと考えられる。

しかし、その梗概は「源氏物語」本文とはかなり異なっている上に、「源氏物語」本文には描かれていないことも含まれている。例えば、3〜4行目に「おり物二かさね薫け二そへて六条院へをくり給ふ」とあるが、朝顔の前斎院が薫物を届けた際に「おり物二かさね」も一緒に贈ったとの記述は見られない。また、1〜2行目に「けんしのひめ君の中宮にた、せ給ふへき」とあるが、明石姫君は東宮妃として入内するのであって、中宮になるのは御法巻を待たなくてはならない。このような「源氏物語」本文を先取りしたり誤解したりしている記述も見られる。ツレが見出せないで、ほかのところでもこうした「源氏物語」本文に書かれていないことや誤解が見られるのかどうかは不明だが、鎌倉期の古筆切には見い出せなかった梗概化の方法である。

梗概化の方法としては「源氏大鏡」や「源氏小鏡」に近いとも言えるが、両書と記述を比較してみると、

あかしの姫君、いつしかおとなに成給へば、御もぎせさせ奉給ふ。(中略) 前の斎院よりとて、散過たる梅の枝に付たる文もてまいれり。おとゞよりたき物をあつらへ申給けるを奉給なり。くろばうなり。ぢんのはこに、るりのつぽふたつすへて、大きにまろがしつ、いれ給へり。御ふみには、檀、花の香は散にし枝にとまらねどうつらん袖に浅くしまめや。(中略) 御返、源氏、花のえにいとゞ心をしむるかな人のとがめん香をばつ、めど。(「源氏大鏡」)

このまき、梅かえといふ事、正月つこもりころ、源氏のおと、の六てういんにて、たき物あはせあり。是は、あかしのうへの御はらの御むすめ、はるみやにまいりたまふ御いそきなり。かうとも、おんかたへくはりて、いとみあわせたまふ。せんさいんと申は、かのあさかほのさいるん、源氏に心つよくて、やみし人なり。この御かたより、ちりすきたるむめのえたに、おん文つけて、こんるりのつほに、たき物いれて、五はのえたにつけ、しろきつほにも、たき物いれて、むめをゑりて、つけられたり。(中略) そのうたに、

花のかはちりにしえたにとまらねとうつらん袖にあさくしまめや

と、ありしなり。

〔源氏小鏡〕<sup>10</sup>

というように、かなり異なっている。

(2) 伝称筆者不明の室町中期の古筆切の場合

まず翻刻を掲げる。

- 1 秋まつむしはうとく見るらん
- 2 鶯のうら、かなるねに かねてしも
- 3 とりあつめたる様なり
- 4 こてうにもさそはれなれし心ありて
- 5 やへ山吹をへたてさりせは
- 6 おまへの若かえてかしは木などの青や
- 7 けりあひたる 雨はやみて風の竹
- 8 花やかにさしいてたる月影おか
- 9 のさまも つらきしもわすれ
- 10 見所ある心ちして

破損

〔慶応義塾図書館蔵 小津家古筆切聚影〕<sup>11</sup> 50)

解説にあるように、左四行の上部が破損して次の頁の文字が見えているので、その箇所は「破損」として翻刻は示してある。

この古筆切は、胡蝶巻に該当する。何箇所かの場面が抜き書

きされるようなかたちで書かれている。1～5行目が秋好中宮の季の御読経の場面の後半に位置する、秋好中宮と紫の上との贈答歌の部分〔源氏物語大成〕七八六⑦～七八七④)、6～7行目前半は光源氏が玉鬘を訪ねる夕方の場面〔源氏物語大成〕七九五⑦)、7行目後半～9行目前半はその夜の場面〔源氏物語大成〕七九七④)、9行目後半～10行目は次の日の場面〔源氏物語大成〕七九九⑧～八〇〇①)に該当する、というように、話はつながっておらず、場面、場面を抜き書きしているような形式を採る。

前半の1～5行目は梗概化しているとも考えられるが、後半は胡蝶巻の梗概として文章をまとめる意識もないようで、各場面を一字分を空けて続けており、抄出しているというべきかもしれない。いずれにしても、ツレが見い出せれば、もう少し梗概化の方法が明らかになってくるだろう。

なお、〔源氏小鏡〕では、

このまきを、こてふといふことは、むかしはいんくう、

一の人、きさきなども、四きに御とつきやうとて、いかめしきほうゑあり。にんわうきやう、大はんにやともなり。

秋この中宮、六てういんにて、おこなはせ給ふ。そのついでに、むらさきのうへ、ほとけに花たてまつりたまふとて、

中宮の御かたへ、はなたてまつらせ給ふとて、とりまいら  
せたまふ。こてう、花そのへ、まいてゐるとありし。おと  
めのまきに、「はるまつその」、御返事、「花その、こてう  
をさへや」と、申をくり給ひしも、このまきなれば、こて  
うといふ。さて、このまきに、ふなあそひ、二のふねうか  
へて、御かくありて、心ゆきおもしろかりし事、これは、  
はるなるへし。〔源氏小鏡〕

のように、季の御説経の場面は少し描かれるが、その後の光源  
氏と玉鬘との場面はまったく触れられていない。〔源氏大鏡〕で  
は、

紫、花ぞの、小蝶をさへや下草に秋待むしはうとく見るら  
ん。秋好中宮、ほそゑみて見給ひて、過にし秋、はこのふ  
たにひろひたりし紅葉の御返と心得給ふ。御返、中宮、小  
蝶にもさそはれなまし心有て八重山吹をへだてざりせばと  
ぞ有ける（此等ゆへを）。〔中略〕源氏も、玉かづらの君をよそに見  
なさん事は口おしくて、源氏、ませのうちに根深くうへし  
竹の子のをのが世々にや生かはるべき。玉鬘、今更にいかに  
ならん世かわか竹の生はじめけん根をば忘れん。〔以下、光  
源氏と玉鬘との贈答歌が続いて置かれる〕〔源氏大鏡〕

のように、季の御説経の場面もその後の光源氏と玉鬘との場面

も和歌が中心で古筆切のような情景描写はない、というように、  
梗概化の内容に違いが見られる。

### (3) まとめ

このように、鎌倉期書写の古筆切には見られなかった梗概化  
の方法を採るものが、南北朝期以降には見られるようになる。  
もちろん、鎌倉期書写のものと同様の梗概化の方法を採る伝俗  
苗代兼載筆切のような古筆切も見られる。

しかし、南北朝期以降は連歌師たちの活躍が始まる時期と重  
なり、「中世源氏物語の世界」とも言うべき「源氏物語」の世界  
が形成されてくる時期でもある。この時期に作成されたと考え  
られる、「源氏大鏡」や「源氏小鏡」は、そうした連歌師たちの  
活躍を後押しするものであったといえる。「源氏物語」本文の梗  
概化にも「源氏大鏡」や「源氏小鏡」、「中世源氏物語の世界」  
の影響が見られる、ということではないだろうか。

### 三 伝冷泉為秀筆夜の寝覚切について

後掲の表に掲げた、伝冷泉為秀筆切については、その理由を

説明する必要があるだろう。当該切は、「古筆学大成」において「夜の寝覚切」として紹介されているものであるからだ。まず翻刻を掲げると、

- 1 はてぬるよにてましらい給はず
- 2 いと、かすかにてをはずとしころ
- 3 のきたのかた大臣の御女にて
- 4 をはしけるひめきみ二人う
- 5 みをきてかくれたまひぬれは
- 6 いとひろくをもしろき宮のうち
- 7 いたくあれゆけはいけやまのこ

〔古筆学大成 第二十四卷〕 図版65)

である。この切に関して、「古筆学大成」の解説で小松茂美氏は、「本文は、現存本の『夜の寝覚』の巻第一の発端部分。ただし、その本文は著しい異文を示している」として、『夜の寝覚』の伝本である島原松平文庫本と比較され、「類似の本文はわずかな部分にすぎない」とされながらも、『夜の寝覚』の巻頭部分に該当することは、まぎれもない」と断じておられる。続けて、現存本がいずれも江戸時代の書写本であるのに対して、これは十四世紀前半のころにまでさかのぼる伝本であり、当時に通行していた『夜の寝覚』と推知できる本文を伝える

ものである。わずか七行分の本文ながら、現存本との比較によつて、『夜の寝覚』を根本的に再考すべき問題を孕むものかも知れない。

とも述べておられる。小松氏が比較に用いられた現存本の『夜の寝覚』の伝本である、島原松平文庫本の該当箇所を見てみると、

そのほいありていとやむことなきおほえにものしたまふ北のかたひと、ころはあせちの大納言のむすめそこにおとこ二人ものし給ふそちの宮の御女のはらには女二人おはしけりかたみともをうらやみなくと、めをきてきほひかくれたまひにしのち世をうきものにこりはて、いとひろくおもしろき宮にひとりすみにておとこ女きんたちをもみなひとつにむかへよせてよのつねにおほしうつろふ御心もたえてひとりの御はねのしたに四所をはく、みたてまつり給ひつ、とある。そこで、伝冷泉為秀筆切と現存本『夜の寝覚』の島原松平文庫本の内容とを比べてみると、現存本の『夜の寝覚』では二人の妻が一人は男二人、もう一人は女二人を産んで死んだ後、新たな妻も迎えず子供たちを同じ邸に迎え育てた、とあるが、伝冷泉為秀筆切では世間と交際せずにいたところ、妻は姫君二人を産んで死んだので、邸が荒れた、となり、類似とい

には赦しい。また、姫君（女）二人を産んだ妻に關しても、現存本の『夜の寝覚』では帥の宮の娘だが、伝冷泉為秀筆切では大臣の娘であり、これも類似しているとするには疑問が残る。要するに、二人の娘を生んだ北の方が死んだ、という共通点しかないのである。これでは伝冷泉為秀筆切が『夜の寝覚』であるとは言い切れず、同様の人物関係がある他の作品（散逸物語を含む）の可能性は残る。

それでは、この伝冷泉為秀筆夜の寝覚切はどのように考えればよいのであろうか。ここで注目したいのが、伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切である。

- 1 よこさまにおほしかまへて此宮を世中
- 2 にたちつき給へくわか御子にしても
- 3 てかしつき給けるさはきになりはて
- 4 ぬる世にてましろひ給はすいとかすかにて
- 5 をはすとしころの北のかたは大臣の御む
- 6 すめにてをはしける姫君二人うみを
- 7 きてかくれ給ぬれはいとひろくおも
- 8 しろき宮のうちいたくあれゆけは
- 9 池山の木たちうちななめて姫君に
- 10 ひは中の君にしやうの事ならはして

11 経をかたてにもちてかつよみつ、しやう

（『古筆学大成 第二十三卷』 図版370）

内容は、『源氏物語』橋姫巻の冒頭近くに該当する。光源氏の須磨退去後、朱雀帝の母である弘徽殿大后の企みによつて、当時東宮であつた冷泉帝の代わりに、宇治の八宮が東宮に据えられそうになつたことから、光源氏復帰後には世間との交際もなく、なり、妻亡き後は邸も荒れ果てる中で、仏道修行をしながら、娘二人に箏や琵琶などを教えて暮らしていることがまとめられている。『源氏物語大成』では一五〇七⑤〜一五一三⑩あたりに該当する内容である。この伝後花園天皇勾当内侍筆切は、先に述べた南北朝以降の梗概化の方法と同様、『源氏物語』本文を梗概作成者の言葉で言い替えており、梗概化された文章は、『源氏物語』本文とは描かれる順序も表現も異なるが、『源氏物語』橋姫巻を梗概化したものであることは間違いないであろう。

この伝後花園天皇勾当内侍筆切と伝冷泉為秀筆夜の寝覚切とを比べてみると、伝冷泉為秀筆夜の寝覚切は、伝後花園天皇勾当内侍筆切の3行目後半から9行目前半までとほぼ一致する。書写の際の誤りかと考えられるようなわずかな異同はあるが、内容、表現などは一致している。表記の違いがあるため、直接の書承関係にはないであろうが、同一梗概本の、別の写本の断



簡同士なのではないだろうか。

伝冷泉為秀筆夜の寝覚切だけからではわかることが限られており、どの作品のどのような写本の断簡であるのかは断定できなかった。しかし、この伝後花園天皇勾当内侍筆切を通して見ると、伝冷泉為秀筆夜の寝覚切は、「夜の寝覚」の古筆切ではなく、「源氏物語」橘姫巻の梗概本の古筆切であると言えるのである。伝後花園天皇勾当内侍筆切と伝冷泉為秀筆切、これら二種類の古筆切のツレがともに多数見い出されれば、より詳しいことがわかってくるであろう。ツレの出現が待ち望まれる。

なお、伝後花園天皇勾当内侍筆切と伝冷泉為秀筆切が「源氏大鏡」や「源氏小鏡」とは異なる梗概であることは、

其比、世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけりと本に有は、源氏の御弟也。太上天皇の第八の御子也。宇治の宮と系図有。うばそくの宮とも、是也。北の方は姫君二人うみ置て隠れ給ふ。其後は、おとこながら、ひじりにて此姫君をそだて給ふ。世の人、ひじりの宮とも、又うばそくの宮とも、又ぞく聖とも申けり。姫君たち十ばかりに成給へば、姉君にびは、中の君にしやうの琴をならはし給ふ。宮は御経をかたてに持て、しやうがし給ふさま、いとなまめかしきよらに見え給ふ。

〔源氏大鏡〕

うちに、ふるき宮すみ給ふ。このみやは、きりつほの御門の八のみや、けんしにも御おと、そかし。れいせんらん御くらゐのおり、しゆしやくゐんの御は、はらあしきさま、よこさまにおほしかまへて、「この八のみやを御くらゐに、たてまつらはや」などの、くわたてありけるに、心かまへやもれけん。源氏なども、御心よからず、おもひたてまつりて、世におしけたれておはしけるか、八てうに御けんにありて、すませ給ふ。この八てうの御家さへ、やけにしのおち、いとあさましく、みやこのすまゐも、むつかしくおほして、宇治に、やまざともちたまへりけるところに、うつりすませ給ふ。それより、宇治のみやと申。やかて、御くしなとおろして、これたかの御この、きたの、やまぢのあとをも、たつね給へきに、いとうつくしきひめきみ、二にん、もちたてまつり給へるか、見すてかたくおほして、そへなから、おこなはせ給ふ。(中略)

このひめきみたちは、きみは、大しんのむすめにておはせしか、いもうとのきみ、うみたてまつりて、やかてはかなく、ならせたまふ。そのまゝ、ひしりにて、そくなからおこない給ふ。

〔源氏小鏡〕

から明らかである。

## 最後に

鎌倉期の梗概本は、「源氏物語」本文を尊重した梗概化をおこなっているのに対して、南北朝期以降の梗概本は、「源氏物語」本文を梗概作成者の言葉でまとめるという、「源氏大鏡」や「源氏小鏡」のような梗概化をおこなうものが現れていた。しかし、「源氏大鏡」や「源氏小鏡」と比較すると、表現や梗概化している「源氏物語」の内容が異なり、両書の影響があるとは言えない。

そうすると、やはりすでに拙稿で述べたように、「梗概本は、各家々もしくは各学問グループなどが、それぞれ自分たちの関心に応じて自分たちなりの梗概本を作り、そしてそれはお互いに書き合ふものではなかったために、さまざまな方法で梗概化された梗概本が古筆切として残っているのではないか」という考えが南北朝以降も含めて成り立つように思う。ただ、伝冷泉為秀筆切と伝後花園天皇勾当内侍筆切のように、一致する梗概を持つ二種の古筆切が時代を前後して現存している、という例が見つかったことで、各家々もしくは各学問グループなどの内部では、書写を重ねて伝えていったことも考えられる。

今後、それぞれの古筆切のツレがある程度の枚数が集成され

たり、新たな梗概本の古筆切の存在が知られたりすることで、中世における「源氏物語」の梗概本に関して、より詳しいことが明らかになるであろう。

中世「源氏物語」梗概本 古筆切一覧

伝西行筆（鎌倉時代前期書写）

1	若紫巻	古筆学大成第23巻 図版340		12行	六半切
---	-----	-----------------	--	-----	-----

伝西行筆（鎌倉時代前期書写）

1	若紫巻	昭和63年東京古典籍下見展観大入礼会目録 835		9行	
---	-----	--------------------------	--	----	--

伝京極良経筆（鎌倉時代前期書写）

1	御法巻	古筆学大成第23巻 図版342		5行	
---	-----	-----------------	--	----	--

伝藤原家隆筆（鎌倉時代前期書写）

1	橋姫巻	平成2年東京古典籍下見展観大入礼会目録 57		10行	
---	-----	------------------------	--	-----	--

伝慈円筆切（鎌倉時代前期書写）

1	若葉上巻	古筆学大成第23巻 図版344	16.7×15.7	13行	六半切
2	若葉上巻	高城弘一蔵			未見(小林強氏による)

伝源頼政筆（鎌倉時代中期書写）

1	柏木巻	鈴木一雄「源氏物語梗概書の古筆断簡」	15.5×14.8	10行	六半切
---	-----	--------------------	-----------	-----	-----

伝藤原為家筆切（鎌倉時代中期書写）

1	薄雲巻	曾田文雄氏所蔵「源氏物語略本切」について	14.7×14.7	11行	六半切
---	-----	----------------------	-----------	-----	-----

伝二条為氏筆切（鎌倉時代後期書写）

1	若葉下巻	国文学古筆切入門 84	15.7×16.9	11行	六半切
2	夕霧巻	潮音堂書蹟典籍目録-53(伝国夏筆)			未見(小林強氏による)

伝吉田兼好筆（鎌倉時代後期書写）

1	宿木巻	古筆学大成第23巻 図版362		5行	
---	-----	-----------------	--	----	--

伝称筆者不明（南北朝期書写）

1	早蕨巻	平成4年明治古典会七夕大入礼会目録 2242		11行	
---	-----	------------------------	--	-----	--

伝冷泉為秀筆（南北朝期書写）

1	橋姫巻	古筆学大成第24巻 図版65	15.3×11.5	7行	古筆学大成では「夜の發覺切」
---	-----	----------------	-----------	----	----------------

伝後花園天皇勾当内侍筆（室町時代初期書写）

1	橋姫巻	古筆学大成第23巻 図版370	16.0×15.0	11行	六半切
2	藤袴巻	高城弘一蔵(伝後土御門天皇勾当内侍筆)			未見(小林強氏による)

伝下冷泉持為筆（室町時代初期書写）

1	梅枝巻	藤井隆「源氏・狭衣の古筆切について」		9行	四半切
---	-----	--------------------	--	----	-----

伝後土御門天皇勾当内侍筆（室町時代中期書写）

1	帚木巻	源氏物語断簡集成 79図	13.5×6.0	3行	
---	-----	--------------	----------	----	--

伝猪苗代兼載筆（室町時代中期書写）

1	総角巻	徳川美術館蔵 手鑑「葉叢」人36	26.3×15.1	9行	
2	夢浮橋巻	金刀比羅宮蔵 手鑑「古今筆陳」		11行	

伝正般（正徹門弟）筆（室町時代中期書写）

1	藤裏葉巻	小林強氏蔵			未見(小林強氏による)
---	------	-------	--	--	-------------

伝称筆者不明（室町時代中期書写）

1	胡蝶巻	小津家古筆切聚影 50	16.9×14.0	10行	
---	-----	-------------	-----------	-----	--

〔注〕

- (1) 拙稿「鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法——古筆切を手がかりに——」(『国文学』(関西大学) 第九十五号 平成二十三年二月)
- (2) 『古筆学大成』第二十三卷(講談社、平成四年六月)、第二十四卷(講談社、平成五年十一月)
- (3) 伊井春樹・高田信敬編『古筆切提要』(淡交社、昭和五十九年一月)
- (4) 久曾神昇編『源氏物語断簡集成』(汲古書院、平成十二年十二月)
- (5) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(『本文研究 考証・情報・資料』第6集 和泉書院、平成十六年五月)
- (6) 国文学研究資料館 (<http://www.nijiac.jp/>) 古筆切所収情報データベース
- (7) 田中登「九三 二条為明 六半切(源氏物語)」(『平成新修古筆資料集』第四集 思文閣出版、平成二十年九月)
- (8) 藤井隆「源氏・狭衣物語古筆切について」(『久曾神昇博士還暦記念研究資料集』風間書房、昭和四十八年五月)
- (9) 『源氏大鏡』の引用は、『源氏大鏡 訂正版』(古典文庫 508、平成元年二月)による。

- (10) 『源氏小鏡』の引用は、岩坪健編『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、平成十七年二月)所収の第一系統第一類 伝持明院基春筆本による。
- (11) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫講座編『慶応義塾図書館蔵 小津家古筆切聚影』(汲古書院、平成元年七月)
- (12) 池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社
- (13) 高村元継編『校本夜の寝覚』(明治書院、昭和六十一年十月)による。

(なかば よしこ)／本学非常勤講師